

18世紀の小説と思想論争

ジュヌヴィエーヴ・アルティガス＝ムナン

(訳＝藤原真実)

フランス18世紀は「哲学者の世紀」であると同時に小説の飛躍の世紀でもあります。そこで問題となるのは、「啓蒙の世紀」とも呼ばれるこの時代の哲学が、小説の内容や形態に影響したのか、またこの影響はどのように現れているのかということです。この問いに答えるのが、本発表の目的です。「18世紀の小説と思想論争」¹について考えるということは、思想論争を含む山ほどある小説のリストを作ることではありません。それは何よりもまず、啓蒙哲学の豊かな特徴である思想論争が小説ジャンルにいかなる影響を及ぼし得たのかを見極めようとすることです。

マリヴォー（1688-1763）の小説『マリアンヌの生涯』は、1731年から1742年にかけて、11部にわたって発表されました。その序文の有名な二節はこの問題を考える上で大変参考になり、指針ともなります。第一部と第二部（1731年、1734年）の序文において、自称編者は、彼が読者に贈るその物語（histoire）と、「単なる想像の産物としての物語（histoire）」すなわち小説との比較を行っています。彼は最初にこう断言します。

読者は波瀾〔の物語〕の中には波瀾そのものしか求めないものだが、自らの波瀾を綴るマリアンヌは、そんなことにはお構いなしだった。彼女はその人生のさまざまな事件について心に浮かぶ省察を一つも割愛しなかった。その省察は、彼女の気分しだいで時には短くなり、時には長くなる。²

¹ 本報告のタイトルは、以下の共著から着想を得たものである。Le Débat d'idées dans le roman français, Geneviève Artigas-Menant et Alain Couprie (dir.), Paris, PUPS, 2010.

² Marivaux, *La Vie de Marianne*, éd. Frédéric Deloffre, Paris Classiques Garnier, 1990, p. [5].

そして編者は、第二部の序文の中でこの言葉を振り返って次のように述べます。

『マリアヌスの生涯』第一部は多数の読者に歓迎されたようだ。特に好まれたのは、そこに散見する省察である。それ以外の読者たちはそれが多すぎると言う。[...] 仮に『人間についての省察』と題された本が出たとして、その省察がすぐれたものであれば、彼らは喜んでそれを読まないだろうか。[...] ならばなぜ本書の省察が嫌われるのか。[...]

彼らは言うだろう。本書のような波瀾万丈の物語には、そうした省察は似つかわしくない。重要なのは、我々読者を楽しませることであって、考えさせることではない、と。

それに対して私たちは次のように答える。『マリアヌスの生涯』を小説と見做すなら、あなた方の言うとおりで。省察が多すぎるし、そんなのは小説や娯楽のためだけに書かれた物語の普通のありようではない。だがマリアヌスは小説を書こうなんてちっとも思っていない。[...] 彼女は作者なんかじゃない、思考する一人の女性であり、女友達のそばで、彼女に話しかけたり対話したり答えたりしているつもりでいる [...] 彼女は書いているのではなく、喋っているのだと思ってほしい。³

このことはマリアヌス自身によって、第一部でさっそく確認されます。彼女が「自分は哲学することはできない」けれど、それは彼女が思考することの支障にはならない、なぜなら「良識は男にも女にも備わっている」⁴からだ、と述べるところです。

「省察」がフィクションに織り交ぜられながら、論文式に「哲学する」ことは必ずしも重要ではないというジャンルの雑種性——18世紀前期における小説ジャンルの進化の自覚をこれほど如実に物語る例はないでしょう。

このことを確認した上で、まずは私が内的思想論争と名づけるものを、次に小説における思想論争の演出を、最後に小説の筋に織り込まれた思想論争を考察したいと思います。

³ *Ibid.*, p. [55]-56.

⁴ *Ibid.*, p. 22.

I. 内的思想論争

内的思想論争に関するこの第一部では、ふたたびマリヴォーから、その円熟期の小説の主人公、マリアンヌとジャコブを例に取ります。まずマリアンヌですが、伯爵夫人となった彼女は、11通の長大な手紙の形で自分の身の上話を女友達に宛てて綴ります。身の上話を依頼したのは女友達の方で、それが「実に珍しい」ので「本にして印刷させる」ためでした。『成り上がり百姓』の主人公ジャコブはといえば、閑暇な隠居暮らしをするなかで、「自分のいろんな事件の話が知識欲のある人々にとって無益であるはずはなかろう」⁵と考へ、「自らの半生の出来事について省察しようという気持ち」を抱きます。回想録や書簡で普通に使われる一人称体が、兩作品にひとり芝居のような性格を与えていますが、それは話の節々で、芝居にあるような内的対話に変化することもあります。出自の問題は、農民の息子である農夫ジャコブにおいても、自らの出自を知らない孤児マリアンヌにおいても、作品全体をとおして常に省察の対象となり、そこに思想論争が生じます。ジャコブの回想録は次のような論争で始まります。

私がこの回想録につけた題名は、自分の出自を公表している。私は尋ねられてそれを隠したことは一度もないし、神様はいつだって私のそういう率直さに報いてくれたように思う。自分に対する人々の尊敬や評価がそのせいで下がったと感じたことはないからだ。

とはいえ私は、貴族の生まれであることや上流階級であること以外の価値を持ちも知りもしない愚か者たちをごまんと見てきた。そういう連中が自分よりすぐれた大勢の人を蔑むのをよく耳にしたものだ。無数のすぐれた資質によって尊敬に値する人々なのに、気弱にも自分の出自を恥じたり隠したり、本当の出自をわかりにくくして世間から見下されないように別の出自を手に入れようとしたというだけの理由で。[...]

いずれにせよ、自分でそれを告白し、自分からそれを言うのであれば、生まれの卑しさで自分の価値が下がると考えるのは間違いだ。

人には見かけによらず道義心があるものだ。自分らが言われなく軽蔑した相

⁵ Marivaux, *Le Paysan parvenu*, éd. Frédéric Deloffre, Paris, Classiques Garnier, 1992, p. 6.

手が立ち向かってくれば、それを立派なことだと思う。それが連中を正気に返すのだ。連中はそういう勇気の中に気高さを感じて口をつぐむ。良識的な自尊心が理不尽な傲慢さを打破するのだ。

だがその話題はもう十分だ。⁶

この最後のことは、複数の人々による論争の最後で、議論を締めくくるために待たれる宣言と同じではないでしょうか。

『マリアヌの生涯』では、出世のための出自の重要性が女主人公の個人的な省察にたえず材料を提供しますが、それをめぐる内的論争が展開するのは、マリアヌの庇護者ミラン夫人の意見が引用されるときです。よき理解者で知的で思いやりのあるこの貴婦人は、マリアヌと実の息子ヴァルヴィルとの結婚を阻止する理由を次のように説明します。

ああ、とはいえあなたに何が欠けているというのでしょうか。美しさも魅力も美德も才知も卓越した心もあなたには備わっています。それこそが何より稀な、何より尊いもののすべて、それこそが嫁いでゆく女性にとって本当の財産なのに。あなたはそのすべてをあり余るほど持っています。ですがあなたは2万リーヴルの年金をお持ちでない。ですからあなたと結婚してもなんの姻戚関係もできないでしょう。私たちはあなたのご両親を存じ上げません。もしもいらっしゃったなら、私たちにとって大きな名誉となることでしょう。愚かな人たち、ものを正しく考えられない人たちにも、私はこの結婚について自分の行動を報告しなければなりません、連中はあなたが堪え忍ぶ不運を瑕疵と呼んで、それをけっして許さないでしょう。

理性はあなたを選ぶでしょうが、愚かしい因習はあなたを拒絶します。⁷

しまいに議論は二人の対話者、マリアヌと修道院の院長の論争に発展します。危惧される身分違いの結婚を阻止するため、マリアヌはヴァルヴィルの家族によつ

⁶ *Ibid.* 下線筆者。

⁷ *La Vie de Marianne*, éd. cit., p. 184. 下線筆者。

て強制的に修道院へ送られるのです。

〔修道院長〕我が娘よ、あなたが相手にしているのは、こういう結婚を許さない権力あるご親戚です。必要なのが人柄だけなら、あなたはほかの女性以上に気に入られると期待して当然でしょう。ですが世間はそれだけでは満足しません。あなたがどんなに立派でも、連中はあなたと姻戚関係になるのを恥じずにはいないでしょう。あなたにすぐれた資質があっても、夫が大目に見られることはありません。あなたのような者を妻として迎えたら、彼は絶対に許されないでしょうし、そうなれば彼の世間的評価は地に落ちるでしょう。たしかに世間がそんなふう考えるのは残念なことです。ですが実のところ、それほど間違ってもいません。身分の違いは人生に必要なことですが、もしもあなた方の場合のように不釣り合いな婚姻、途方もなく不釣り合いだとさえ言える婚姻を許してしまえば、身分の違いは存在なくなり、秩序もなくなってしまうからです。

〔マリアヌ〕ああ、院長様、どうかもうご勘弁ください。[...] はっきり申し上げますが、この問題についての省察も屈辱ももう十分でございます。[...] これ以上の辱めはないでしょう。同じことを繰り返しても、こんなに苦しんでいる哀れで不幸な娘をさらに打ちひしぐだけです。あなたさまは修道院長で修道女でもいらっしゃるのですから、ただ私をお哀れみになり、私を迫害する人たちの手助けを断ってくださいればよろしいのです。⁸

このようにマリヴォーの二人の主人公の個人的な関心事は、出自、財産、身分違いという同時代の論争につながっているのです。ジャコブとマリアヌが行う多数の省察からもう一つ、両小説の全体にわたって何度も繰り返される、信心についての省察を取り上げましょう。ジャコブに省察の機会を与えたのは、アベール姉妹とその霊的指導者との出会いです。マリアヌの場合は、慈善を装ってその貞節を脅かすクリマル氏の行動が引き金になります。いずれの場合も、意図するところはモリエール、ボワロー、ラ・ブリュイエールの風刺ではなく、本格的な論争の応酬で

⁸ *Ibid.*, p. 298-299.

す。ジャコブもマリアンヌも信心を非難するどころか、ふたりとも得々として敬神と偽善を区別してみせます。ジャコブが次のように述べる時、それは単なる慎重な陳述ではなく、賛否をめぐる本格的な論証なのです。

本物の敬虔さと、一般に信心と言われるものの間には大きな違いがある。

信心家は世間を苛立たせるが、敬虔な人々は世間を感化する。信心家は信心家の辱しか持たないが、敬虔な人は心が敬虔なのだ。信心家が教会に行くのは単にそこへ行くため、そこにいることを楽しむためだが、敬虔な人はそこで神に祈るために行く。敬虔な人には謙虚さがあるが、信心家が求めるのは他人の謙虚さだけだ。敬虔な人は真に神の僕であるが、信心家はそのふりをしているだけだ。⁹

マリアンヌも、心の中で慈善についてクリマル氏のような似非信心家たちと対話するとき、同じように言います。

哀れな人を気遣いもしない慈悲心とは何なのでしょう。助けてあげる前に、まずその人の自尊心を踏みつけにする慈悲心とは何なのでしょう。善行を施すべき相手を絶望に追いやる善行とは結構なものですこと。慈悲深い人は慈善事業をするから慈悲深いのでしょうか。滅相もない。人が私の不幸の詳細に立ち入ってくどくど話したり、私の貧しさを私に突きつけたりするなら、私に救いの手を差し伸べる前に儀式ばった質問とか尋問で私を打ちひしぐなら、私はそんな人たちにこう言ってやりましょう。あなた方はそれを慈善事業と呼びますが、私に言わせればそんなものは野蛮で憎むべき行い、機械的な行いであって、心からの行いではありません、と。¹⁰

ここでマリアンヌの雄弁が冴えているのは、ミラン夫人の誠実で尊敬すべき慈悲を思い出してそれとこれとを比較しているからです。ミラン夫人が「惜しみなく与え

⁹ *Le Paysan parvenu*, éd. F. Deloffre et F. Rubellin, Classiques Garnier, p. 47.

¹⁰ *La Vie de Marianne*, éd. cit., p. 29-30.

たのは、そうするのが立派だからではなく、それが必要とされていたから¹¹でした。

ジャコブとマリアンヌの波瀾が自然な発端となって生じる内的論争の例はまだまだ挙げられます。ここでは二人の主人公の省察と、『赤貧の哲学者』と『哲学者の書齋』¹²の語り手である「ジャーナリスト」の省察が、きっかけと表現の点で共通していることを強調するだけにとどめます。それらの著作の特徴は、一人称体の直接的な語り、視点の変化を最小限に留めていることです。

II. 小説における思想論争の演出

それとは反対に、本講演第二部のテーマである小説における論争の演出は、作中人物の数、複数の語り手の存在や場面の多様性から自ずともたらされるものです。ロベール・シャル（1659-1721）の小説『フランス名婦伝』はその例を鮮やかに示してくれます。この作品の構成自体が対話向きにできています。それぞれ独立した7編の物語は、作者兼語り手によって枠物語の中にまとめられていますが、その枠物語では、物語の合間合間で、選ばれたひとかたまりの対話者らが出会い、多様かつ緊密に関係し合う主題についていつでも意見を言い、批評し、議論できる状態にあります。こうして小説の二種類の対話——各物語の登場人物間の対話と、枠物語の人物間の対話が、台詞の不揃いなやりとりのせいで微妙にぶつかり合いながら結びつくのです。女性主人公は悲劇的な運命に屈しないかぎり、みな聞き手になりますが、語り手になることはありません。男性主人公はそのうちの5名が語り手と聞き手両方の役割を果たします。

7つの物語は幸福に終わるものとそうでないものがありますが、いずれも妨害される恋愛の物語ですから、主要な論争の一つが結婚についてであることに意外性はないでしょう。¹³それらの物語の面白さは、女性の不貞や〔女性を〕ものにした後の

¹¹ *Ibid.*, p. 169.

¹² Marivaux, *L'Indigent philosophe* (1727-1728) et *Le Cabinet du philosophe* (1733-1734) dans Marivaux, *Journaux et Œuvres diverses*, Frédéric Deloffre et Michel Gilot éd., Paris, Garnier, 1969, p.[327]-437 et p.[271]-323.

¹³ この点についてはジャック・コロミエの以下の研究書を参照。 Jacques Cormier, « Les dialogues sur le mariage dans les romans de Robert Challe », dans *Le Débat d'idées dans le roman français, op. cit.*, p. 17-36.

満腹感についての言い古された紋切り型から女性の立場に関するきわめて独創的な言説にいたるまでの多様な意見を付き合わせることにあります。粹物語の対話の中でデ・フランが「女性はほとんどみんなペテン師だ」¹⁴と宣言するとき、彼は型にはまった表現で自分の幻滅を語っているにすぎません。同様に、やはり粹物語で、「夫にとって妻の愛情はたいがい鬱陶しいものだ」¹⁵と告白するコンタミーヌは、決まり文句を並べているだけです。これら二つの女性蔑視発言は、7番目の物語の中で、目の覚めるような反論に出会うことになります。シャルはそこで、或る未亡人と、夫の不貞を嘆く未亡人の妹の討論を描いています。妹を慰めようと、未亡人——彼女は常にそう呼ばれます——は、素朴な自然にねざした大胆な理論を展開します。

女性にとって、愛の悦び以外の悦びがこの世にあるでしょうか。私たちが結婚して主人を受け入れる決心をするのは、支障なく堂々とその悦びを味わうためではないのですか。夫の意思以外の意思を持たず、その不機嫌をさえ堪え忍ぶほど卑屈になるのもそのためではないのですか。¹⁶

そこから彼女は、殿方が同様に「激しい心の動き」を感じてそれに従うのも驚くべきではない、なぜなら慣習が「彼らの行動を許し、あるいは少なくとも容認しているように思われる」からだ、と結論します。彼女はこの不公平を嘆きますが、とはいえ「彼らの心変わりを悪く思うべきではない」、なぜなら女性であっても、大胆になれば、そして評判を落とすのを恐れなければ、同じように振る舞うだろうから、と断じるのです。彼女が社会の掟に従うのはそれを恐れてのことであって、非常な明晰さをもってそうしているのです。

私はこれまで〔中略〕貞潔な妻が夫とともに歩むべき道を歩んできました。神

¹⁴ Robert Challe, *Les Illustres Françaises*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques Cormier, Genève, Droz, 1991, p. 217.

¹⁵ *Ibid.*, p. 294-295.

¹⁶ *Ibid.*, p. 511.

が私に生を授けたその土地の習慣に従ってきましたが、従わずにいても心配もスキャンダルもないなら、私はそうしていたことでしょう。私が考える女性の真の貞潔はつまり、性向がそれへと駆り立てるさまざまな情念を克服することにあるのです。¹⁷

デュピュイは、女性たちがこの未亡人と同じくらい正直だったら、彼女の言うことは全部正しいと認めるだろう、と断言してその話を締めくくり、テルニーも強い口調で「彼女らはみなあなたの未亡人と同意見だ」¹⁸と断定します。ほかには誰も意見を言おうとしないまま、ともかくも結婚についての論争は終わります。しかしそれ以外の論争が、この問題に関する聞き手たちと読者の考察に補足的要素をもたらしてくれます。

第6の物語のデ・フランとその告解をするカルメル会神父の議論を短く取り上げましょう。シルヴィーと秘密裡に結婚したデ・フランは、生家が火事になったという報せを受けて、急いで田舎へ向かいます。4カ月後、彼はシルヴィーが驚き喜ぶのを見るため、予告なしにパリに戻りますが、彼が見たのは、親友ガルアンの腕の中にいる彼女でした。ガルアンはシルヴィーが結婚していたとは知らず、魔法の媚薬で彼女のつれなさを克服したのです。デ・フランは決闘で（そのつもりはなかった）恋仇を負傷させ、不貞の妻（彼女にもその意思はなかったのです）に途方もなく残忍な罰を与え、弁明にいったい耳を貸さずに彼女を修道院へ連れてゆきます。絶望して重い病に倒れたデ・フランは死線をさまよひ、面識のあるカルメル会神父が呼ばれます。その神父にデ・フランは懺悔し、罪の赦しを求めます。

この人の説き勧めほど心にしみる話を聞いたことはありませんでした。私が妻とガルアンを許すと約束しないかぎり、それ〔罪の赦し〕は与えないと神父は言いました。私のやり方次第でいろいろな機会から彼女を遠ざけられたのに、私は4カ月も家を留守にしたばかりか、彼女のそういう性向にもかかわらず、仲間に会うことを彼女に強いたのだから、彼女の転落はほとんど私が招い

¹⁷ *Ibid.*, p. 513.

¹⁸ *Ibid.*, p. 535-536.

たようなものであると論じました。自分の敵を許す必要を教えてくださいました。夫婦の貞節に関する神の掟は、夫にも妻にも関わること、あるのはただ男たちの腐敗と、女性を断罪することで男性を赦しているように見える暴力だけなのだと教えてくださいました。最後に神父はあらゆることを尋ねたり勧めたりし、私は彼の言うとおりに何でも約束しました。心の底からそう約束したのです。¹⁹

この宗教的なエピソードは、それまでデ・フランが特に敬虔さを表に出してこなかっただけにますます重要性を帯びます。ところで、ここに示されているのは、先に見たように、第7話で未亡人が語ることになる、自然に則した男女平等擁護論のキリスト教版なのです。

それに加えて、シルヴィーは自らの慢心を次のように後悔します。

ああ、私はそれまでずっと罪を犯さずに生きていました。私の人生は平穏に流れていたの、感覚が鈍磨していたのです。いつも標榜していた貞節と婦徳が未来を保証しているように思われました。何という見当違いでしょう。[...] そんな無分別の落とし穴に落ちたのは神の思し召しだったのです。神は私をお見捨てになったのです。²⁰

ここで私たちはこの時代に白熱していた予定と恩寵をめぐる議論に入ってゆきます。自らの罪について自問する作中人物たちの口を借りて行われるとき、この神学的論争はまったく際だったものになります。この小説はフィクションのあらゆる表現手段を不安な意識の迫真的な口調に混ぜ合わせながら彼らの罪を描いているのです。

『フランス名婦伝』の出版から約50年後、ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）

¹⁹ *Ibid.*, p. 426.

²⁰ *Ibid.*, p. 431-432. このテーマについては、下記を参照されたい。G.アルティガス＝ムナン『非合法作家の秘密からヴォルテール式のプロパガンダへ』II-2.『フランス名婦伝』における宗教 G. Artigas-Menant, *Du secret des clandestins à la propagande voltairienne*, Paris, Honoré Champion, 2001, p. 76-108.

による世紀のベストセラー小説『ジュリー、または新エロイーズ』（1761年）が発表されます。多声構造を持つ書簡体小説で、シャルルの小説のそれとはだいぶ異なりますが、この形式もまた、思想論争の演出に大いに適しています。5人の主要登場人物²¹が取り交わす往復書簡は、彼らが報告する諸々の論争と同様、それぞれの間に、手紙から手紙へと論争を展開してゆきます。そこにルソーの脚註も加わりませんが、いくつかの説明的なものを除けば、そのうちの多くは作中人物たちの言葉を解説したり論じたりするものです。このように論争は至るところにあり、テーマは教育、結婚、美德、情念、名誉、主従関係、決闘、宗教についての無関心、等々多岐にわたっています。

ここで私たちの関心を引くのは、自殺についての議論です。²²ジュリーは家庭教師サン＝ブルーと相思相愛の仲になり、肉体関係で結ばれます。ジュリーの父親デタンジュ男爵は、身分違いの二人の結婚を許さず、ジュリーをヴォルマル氏と結婚させます。ロンドンでそれを知ったサン＝ブルーは命を絶つことを考え、親友エドゥアール卿にそのことを打ち明けます。

そのとおりです、私の心は生きることの重圧に押しつぶされています。ずっと前からそれは私の重荷でした。それを大切だと思わせてくれるあらゆるものを私は失いました。残されたのは倦怠だけです。ですが、生を授けてくださった方の命令なしにそれを勝手に処分することは許されないと人は言います。[...] 罪を犯さずにそうできると確信できるまではけっしてそれをしないうもりです。[...] 私は生以上に罪を憎んでいます。永遠の存在者を崇めています。²³

哲学に抒情が入り混じったこの前置きの後、サン＝ブルーは友の英知に委ねると断言します。「私の理性を照らしてください、私の心に語ってください。あなたの話

²¹ サン＝ブルー、ジュリー・デタンジュ（後のジュリー・ド・ヴォルマル）、その従妹クレール、エドゥアール・ボムストン卿、ヴォルマル氏の5人を指す。

²² Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Henri Coulet éd., Paris, Gallimard, collection folio, 2 vol., t. I, troisième partie, lettres XXI à XXIV, p. 447-466.

²³ *Ibid.*, p. 447.

を聞く準備はできています。」そう言いながらも彼はそれから約10ページにわたって、古代ギリシアから福音書、ラクタンティウス、アウグスティヌスを経て同時代にいたる広範な教養を基礎に、ありとあらゆる賛否両論を展開します。²⁴

ですから思い切って避けましょう、私たちが避けられる不幸は全部。それでもまだ私たちにはあり余るほどの苦しみが残るでしょう。後悔なしに人生から解放されましょう、それが私たちにとって悪となったらすぐに。それをするのは私たちしだいなのですから、それをしても神も人も傷つかないのですから。至高の存在には犠牲が必要なら、死ぬしかないじゃありませんか。神が理性の声を介して私たちに命じる死を神に捧げましょう。彼が返却を求める私たちの魂を静かに彼の懐の中に流し込みましょう。²⁵

エドゥアール卿の返信を読む前に、読者はこの小説の最も長い脚註の一つに、次のようなルソーの解説を見出します。

議論されている問題のわりに奇妙な手紙ではないか。人は自らのためにそのような問題を検討する場合、そんなに穏やかに推論できるのだろうか。[...] 時代や国柄による偏見に気をつけよう。自殺が流行っていないときは、自殺をするのは逆上した人たちだけだと思われる。軟弱な心の持ち主には、勇気あるどんな行動も妄想と映る。だれしも自分を通してしか他人を評価できない。²⁶

作者のこの意見は、作中人物であるスイス人サン＝ブルーに対して辛辣ですが、それがもう一人の作中人物であるイギリス人エドゥアール卿の返書の伏線となっています。

²⁴ ルソーは特にスウェーデンの哲学者ヨハン・ロベックの『自殺論』 *Exercitatio philosophica de morte voluntaria* (1736) に言及している。ロベックは実際に1739年に自殺を遂げた。

²⁵ *La Nouvelle Héloïse*, éd.cit., p. 455-456.

²⁶ *Ibid.*, p. 456.

若者よ、きみは無分別な激情に惑わされている。[...] 常軌を逸した悲しみがきみを愚かに非情にしているのだ。きみは人間じゃない。何の価値もない。きみの本来の人となりを考慮しなかったら、今のきみ以下のものはこの世に見当たらないくらいだ。

きみの手紙だけでその証拠になる。かつてはきみの内に思慮分別と真理を見出したものだ。[...] きみの得意げな手紙の理屈に私が何を見出したと思うかい？ くだらない詭弁の果てしない繰り返しだ。それがきみの理屈の錯乱の中に心の錯乱を際立たせている。きみの妄想を哀れに思わなかったら、それを指摘してやる気にもならなかっただろう。²⁷

この英国人の激しい非難は、作者の註がその土壤を用意していただけにいつそう衝撃的です。一方で作者自身は「軟弱な心の持ち主」に否定的で、それがエドゥアール卿の侮辱的で挑発的な軽蔑——「きみは人間じゃない。何の価値もない」に呼応しています。他方、「時代的・国民的偏見」と「流行」へのルソーの言及は、一英国市民（エドゥアール卿）によって発せられる自殺反対論を補強する役割を果たします。当時自殺は典型的に英国的な現象であり、それがきっかけでフランスでも自殺をめぐる大論争が起きました。そのため、省察や経験に基づく卿の論拠により多くの力が与えられているのです。

このように、18世紀小説は筋の中で思想論争を演じさせることで、思想論争を際立たせるのです。物語の筋と論争を混ぜ合わせることに曖昧さはつきものです。しかし小説家たちはそれらの論争を、知的な長い会話からなるいくつかのエピソードの唯一の主題とすることにより、論争をより体系的に、より明らかに操作することができたのです。

18世紀初頭ヨーロッパの知識人社会は、会話を人生最大の楽しみの一つと見做していました。それゆえ一部の小説家は、哲学的あるいは神学的問題についての知的なやりとりにより丸ごと捧げられた長大な文章で彼らの物語を飾ったのです。

²⁷ *Ibid.*, p. 457-458.

Ⅲ. 小説の筋に組み入れられた思想論争

第三部では小説の筋に組み入れられた思想論争を論じますが、その例として取り上げるのが、プレヴォー（1697-1763）の『デ・グリユー騎士とマノン・レスコーの物語』（1731）です。周知のとおり、『或る貴族の冒険と回想』の第7巻にあたるこの「物語histoire」は、架空の「作者」ルノンクール侯爵によって語られます。短い前置きの後、語りはルノンクールから主人公デ・グリユーへと引き継がれ、今度はデ・グリユーが自らの波瀾の物語を一人称体で語る語り手となります。物語が始まるのは彼が17歳のとき、マルタ騎士団への入会を前に哲学の勉強を優秀な成績で終え、アミアンのコレージュを去ろうとしているところです。「アミアンを離れる私の唯一の心残りは、常に深い友情で結ばれていた親友をそこに残してゆくことでした」²⁸と彼は言います。ティベルジュというその親友は、彼より3歳年上で、聖職に就くことが決まっています。ティベルジュの精神的な人物描写は、この人物が物語を通して占めることになる位置や役割を予告する機会となります。

彼には無数のすぐれた資質がありました。あとに続く物語の中で、あなたは彼の最良の資質をとおして、またとりわけ、古代の最も名高い例をも凌駕するほどの、友情における熱意と献身をとおして、彼を知ることになるでしょう。あの頃私が彼の助言に従っていたら、私はずっと品行方正で幸福でいたことでしょう。情念に引きずり込まれた深い穴の中で、彼の叱責を活かすことさえできたなら、富と名誉の失墜からわずかでも救えるものがあつたでしょう。しかし、そんなに世話を焼いてくれたのに、彼がそこから得たものといえば、それが無駄だったと知る悲しみ、腹を立てたり迷惑がったりする恩知らず者から恩を仇で返される悲しみだけでした。²⁹

この予言はすぐに現実になります。デ・グリユーはマノンという見知らぬ美女のうっとりするような最初の一瞥で転落するのです。

²⁸ Prévost, *Histoire du chevalier des Grieux et de Manon Lescaut*, éd. Frédéric Deloffre et Raymond Picard, Paris, Classiques Garnier, 1990, p. 18.

²⁹ *Ibid.*, p. 18-19.

彼女があまりにも魅惑的に見えたので、それまで男女の性差について考えたことも、若い女性をほんの少し注意して見たこともない、誰からも思慮深さと慎みを称賛されていたこの私が、突然心に火がついたかと思うと逆上の域に達したのです。³⁰

「思慮深く品行方正な青年」ティベルジュは、すぐに危険を見抜き、マノンをさらって逃げる計画を実行しないでくれと親友に懇願します。彼はデ・グリユーに「それについて15分以上も続く真剣な説教」をしますが、これが思慮深く愛情に満ちた配慮の最初の表れです。それに対してデ・グリユーは偽りの約束で応えますが、その後も偽りの約束は延々と繰り返されることになります。

駆け落ちした二人がパリに落ち着くと、まもなくマノンは裕福な徴税請負人に密かに囲われますが、この徴税請負人がデ・グリユーの父親に密告します。実家に強制送還された主人公は厳重な監視の下に置かれ、ティベルジュの訪問を受けます。そこで始まる長い会話の中で、この無二の親友はデ・グリユーに「若さゆえの過ちを業にして、快樂の空しさに目を開くように」³¹と説き勧めます。彼はそう助言するだけでは足りず、彼自身も「真剣な検討」をして確信にいたったというその助言の真実を証明してみせます。「考察に寄り添って」くれた「神にも助けられ」ながら、「理性の力で快樂の成果と美徳の成果を比較」したのだと言います。ティベルジュの熱意は非常に説得的なので、「最初の訪問時から」デ・グリユーは「彼のようにこの時代のあらゆる快樂を絶って聖職の道に入りたいという強い気持ち」³²を感じはじめます。これが快樂とキリスト教的英知に関する二人の友の長い論争の始まりです。この論争の後、まずデ・グリユーの中に一つの内的論争が起りますが、ここではホラティウスのな幸福の甘美な夢想も、マノンのことを考えただけで消え去るのです。

ほくは学問と宗教に専念しよう、そうすれば愛の危険な快樂のことなど考え

³⁰ *Ibid.*, p. 19.

³¹ *Ibid.*, p. 38.

³² *Ibid.*, p. 40.

られなくなるだろう。普通の人々が称賛するようなものをほくは軽蔑するだろう。ほくの心はそれが評価するものしか求めないはずだから、不安も欲望もほとんどなくなるだろう。そう言うと、私は前もって平穏で静かな生活の実践方法を考え出しました。私が思い描いたのは、人里離れた場所に建つ家と、庭のはずれにある小さな森と淡水の小川、選りすぐりの書物のある図書室、高潔で良識ある一握りの友だち、洗練されているが質素で慎ましい食事でした。[...] たしかにこの計画は私の好みを大いに満足させました。けれども、そのように思慮深く手はずを整えた後も、私は感じていました。自分の心がまだ何かを待っていることを。人里離れたこの上なく美しいその場所で、それ以上何もほしくないとするためには、マノンがそばにいる必要があるということ。³³

デ・グリユーが父親の家にいるあいだ、ティベルジュが頻繁に訪問を重ねた結果、デ・グリユーはサン＝シュルピス神学校に入る気持ちになり、ティベルジュが卒業する時期に神学の勉強を始めることになります。約一年後、学業と「いつもそこにあるティベルジュの助言」、そして「自分自身の省察」によって情念の克服が確実になるうとしていたそのとき、かつてないほどに「愛らしく、輝いた」マノンが再び現れます。ソルボンヌ大学の「神学部公開演習」の後、神学校の談話室でのことです。この思いがけない再会は、瞬く間にデ・グリユーの正しい決心をすっかり忘れさせます。二人はシャイヨーに居を構えますが、そこが火事になり、徴税請負人がマノンに「気前よく」与えてやったちょっとした財産をすべて失ってしまいます。この新たな運命の一撃に駆り立てられるようにデ・グリユーは「親友ティベルジュに助けを求め」、バレ・ロワイヤルに呼び出します。そこでベンチに腰掛けるふたりの友は、情念と思慮分別をめぐる論争にふけります。軍配は情念の方に上がります。ティベルジュはデ・グリユーをマノンと別れさせられぬまま、彼に「いくらかの金を渡す」のを承諾してしまう³⁴からです。その後は、デ・グリユーがマノンの贅沢な出費を賄うためインチキ賭博をして悪徳にのめり込んでゆく一方、ティベルジュは彼を「頻繁に訪問」します。そこでの論争は、ティベルジュの方は大ま

³³ *Ibid.*, p. 40-41.

³⁴ *Ibid.*, p. 58-60.

じめですが、デ・グリユーの話には揶揄と滑稽が入り混じります。

彼の説教は延々と続きました。きみは自分の良心や名誉や運命を踏みにじっていると何度も何度も指摘しました。私には従うつもりなど毛頭ありませんでしたが、彼の意見をおとなしく聞いていました。その熱意がどこから来るのかわかっていたので、彼には感謝していました。ときおり私はマノンもいる前で彼をやさしくからかったり、愛人と聖職禄を上手に両立できる大勢の司教やその他の司祭みたいに適当におやりなさい、などと忠告したりするのです。³⁵

しまいにティベルジュは悲痛な調子でこの論争を（一時的に）締めくくります。

さようなら、恩知らずで心の弱い友よ。きみの罪深い快楽が影のように消え去ってしまえばいい！きみの財産も金もすっかりなくなり、きみがひとり丸裸になって、きみを狂ったように有頂天にさせた富の空しさを思い知ればいい！そうなったときには、ぼくは喜んできみを愛し、きみの役に立とうとするだろうが、今はきみと一切の関係を絶ち、きみの生き方を憎む。

ふたりの友の間に道徳的・宗教的論争が再開するのは、デ・グリユーが閉じ込められたサン＝ラザールの牢獄でのことですが、そこで論争はまさしく弁論合戦——デ・グリユーはティベルジュの言葉を間接話法で書き、直接話法は自分のために確保しているので、対等な闘いとは言えませんが——の形を取って絶頂に達します。³⁶機先を制するデ・グリユーは、シニカルとは言わないまでも明晰な告白をします。

きみがここで再会したのが品行方正で欲望を制御できる友人、天罰によって目が覚めた放蕩者、要するに愛から解き放された心、マノンの魔法から解放され正気に戻った男だと思ったのであれば、きみは私をいかぶりすぎだ。きみが再会したのは4カ月前に別れたときと同じぼくなんだ。相変わらず愛に脆く、

³⁵ *Ibid.*, p. 65.

³⁶ *Ibid.*, p. 90-93.

致命的な愛情ゆえに依然として不幸だが、この愛情の中にほくは倦まずたゆまず自分の幸福を探し続けている。³⁷

そこでティベルジュは友の「許しがたい」行動について道徳的かつ合理的な見解を下します。——「愛着の対象が自分を罪深く不幸にすることしかできない」とわかっているデ・グリユーは、「美徳がもたらす幸福より悪徳がもたらすそれを公然と好むようになるほど、悪徳の偽りの幸福に酔いしれる罪人たち」とは違う。彼らは「うわべに騙されて」幸福の虚像に執着しているが、デ・グリユーは「自分の意志で不幸と犯罪の中へ落ち続け」ている。そんなのは「考えと行動の矛盾であり、彼の理性に恥をかかせることだ」と。この「理性」という言葉にデ・グリユーは激しく反論します。

ティベルジュ、と私は再び話し出しました。相手が何の抵抗もしなれば、勝利はさぞ容易いだろう。だが今度はほくの理屈を言わせてくれ。美徳がもたらす幸福には苦痛も障害も不安もないときみは断言できるかい？ 牢獄、十字架、責め苦、暴君が課す拷問にきみはどんな名前をつけるだろう。神秘主義者のように、身体にとっての苦痛は魂にとっての幸福だときみは言うだろうか。言えるはずがない、そんなのはばかげた矛盾だからね。きみがあんなにも称揚するその幸福にも、だから無数の苦痛が入り混じっているし、もっと正確に言うなら、そんなのは不幸の連続でしかない。人はそれを通り抜けてはじめて至福に近づけるのだ。³⁸

デ・グリユーはそこで物質的な幸福の希望とキリスト教的希望の比較を延々と行い、次のように結論します。

ほくが願う幸福は近くにあり、もう一方の幸福は遠くにある。ほくの幸福は痛み
みの性質を帯びている、つまり体感じられるものだが、もう一方の幸福の性

³⁷ *Ibid.*, p. 90.

³⁸ *Ibid.*, p. 90-91.

質は不明で、信念によってしか確かにならない。³⁹

この「不敬神と反宗教の情けない詭弁」、「きわめて無信仰できわめて非道な」この比較はティベルジュを戦慄させますが、デ・グリユーはその後もなお美德と愛の対立に関する「論証」を続け、反論を先回りして友に答えるすきを与えません。彼はまた自分に都合のいいようにティベルジュの論拠を逆手に取りさえします。「愛の悦び」が「甘美で魅力的」であればあるほど、「(それを神のために犠牲にするなら)神はますます気前よくそんなに大きな犠牲に報いてくれる」が、愛の悦びはこの世では「最も完璧な幸福である」という事実を「説教師たち」は強調した方がいいとさえ言うのです。ティベルジュはそんな友の考えの中に「合理的な何かがある」ことを認めますが、だからこそデ・グリユーは自らの原理にしたがひ、「それほどに大きいと考えるその報いの希望に」自らの愛を犠牲にするべきだと反論します。デ・グリユーが自分には恩寵が欠けているという論拠で答えると、ティベルジュはそれをジャンセンイズムだとして非難します。このように、二人の友の状況に緊密に結びついたこの対話は、世論を湧かせた同時代の論争——自由、救済、恩寵についての論争に同時に合流するのです。

また小説の筋の観点から見ると、この「会話」はティベルジュの「同情心をよみがえらせ」てもいます。「悪意よりも多くの弱さを前にした」ティベルジュは、このままでは「友はきっと極貧の中で死んでしまうだろうから」と「救いの手を差し伸べよう」とします。こうして二人は、あらためてリュクサンブール公園で落ち合うこととなります。しかし今度は議論はありません。デ・グリユーは用心深く、「お人好しのティベルジュ」の「説教」を黙って聞くのです。ティベルジュはまたもや「非難や勧告や脅迫」を繰り返しますが、やはりうまくゆきません。⁴⁰

マノンが流刑となりヌーヴェル・オルレアンで死に、ティベルジュの波瀾に満ちた長旅が終わってはじめて、この「すぐれて高邁で一途な」友は、デ・グリユーからこう言われることとなります。「かつてきみがほくの心の中に蒔いた美德の種が、果実を結び始めている。きみはその果実に満足するだろう」⁴¹と。小説と論争を同時

³⁹ *Ibid.*, p. 91.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 111-114.

⁴¹ *Ibid.*, p. 204.

に締めくくるこの結末は、まだマノンとの罪深い幸福に溺れ、ティベルジュの警告に耳を貸さなかった頃のデ・グリユーの予告的な言葉によって準備されていたのです。

彼の説教は私にいくらかの印象を残さずにはいませんでした。こうして私は、自分の心が善へと帰ろうとするのを感じるいろんな機会があったことに気づくのです。なぜなら、その後、人生最悪の不幸の中でもなお私がかんばれたのは、一部にはこのことを思い出したおかげなのですから。⁴²

ここまで、プレヴォーが小説中に展開する口頭の議論を分析してきましたが、結論として強調したいのは、読者を惹きつけるこの小説の筋とは別に、明白で首尾一貫した正真正銘の思想論争が導きの糸となって、作品全体を知的で悲愴な結末へと導いているということです。

思想論争と小説の創作との美学的関係をめぐる私たちの考察を最後に深めてくれるのは、『運命論者ジャックとその主人』です。周知のとおり、ディドロにおいて対話はとりわけ重要な意味を与えられたエクリチュールの形態です。この小説の中でディドロは、旅のおかげで暇を持てあました二人の作中人物間に思想論争を組織するだけでは足りずに、作者と読者の間にも議論を促します。この議論が主に対象とするのは、小説創作に緊密に結びついた概念である運命の概念です。なぜなら、現実には運命は私たちの自由を限定するものですが、小説家は自由に宿命を操作するからです。このように、小説ジャンルはジャンルとして中心的な思想論争を引き起こします。小説の危機が18世紀と20世紀に起こるとき、それはまず思想の危機なのです。

⁴² *Ibid.*, p. 66.